研究

富尾権現と御霊信仰

佐脇貫一

『実に、佐伯の一統滅亡の後は、さまざま神変を現はし、祟をなすこと止む時なし。幻に見え現に飛んで賞罰有れば、荒天神と祭りて、漸く穏かになれば、馬上にて水まねらせし黒沢の多田弥四郎の娘、若狭に乗うつり、地を走り水を歩む事、恰も平地を行くが如し。父に向ひ、汝我を知らずや、佐伯惟治也。驚いて皆村中数輩手を突き膝を屈して、いかなる御事にて御越候哉と探しぬれば、我旅の疲れに水を乞たる時、若狭に一言残すといへども、我帰城せず空と成、然れば水の返答を今云知らすなり。汝等此若狭を崇めて所の長とも思ふべし。此黒沢に我霊魂を祭り、宮地に鳥居を建て、清浄と改むべし。若し疑心を生ぜば、村を退転さすべしと託ありて、若狭絶えしして倒れける。忽身より汗を出し三日の間人心なく、前後を忘れにけり。其後、此の言葉をたづぬるに、敢て不覚。是を初めの不思議として、討手の大将近江守長景、俄に大病大熱発して身体焼くが如く、一晝夜の間蹉跎して死す。日向の三河内にて敵対したる本人、新名の一党悉く不宜病を受け、数日を経ずして死絶たり。最後の筋立さはりたる者は、云ふに及ばず。其後御死骸に手掛、鎧甲に障りたる者、其外維治公を迷霊と見掛たる者、増して面を合せたる者、一人も生たる者なし。朝は日の出をまつて作す所に出で、暮は未燈させずして門戸を開ぢて通路となし、依て怨霊なだむべしとて、黒沢の村内に地祭して、神を立て社を建立す。富尾権現と奉崇、神託あらたなり。常盤の祭十一月廿五日を毎年の建日と定め、従五位下朝衆大夫前薩州大司惟治大幾正徹禅定門、御曹子玉甫宗日禅定門と申奉る。御本山定光寺富尾権現是也。神仏両部に崇敬せらる。怨霊怒ち神威をおかされて、佐伯に数十ヶ所社檀建立あり。又三河内に惟治公の御鎧、太刀、鞍などを神霊と崇め、六社の権現とす。』

これは梅牟礼実録巻の下にある「富尾権現の由来」で佐伯市青山地区黒沢の富尾神社すなわち富尾大権現社祭祀の縁起である。鶴谷外史の『豊後史実辨妄』には

富尾権現社は海部郡梅牟礼城主佐伯薩摩守惟治の神霊を祭祀せる祠にして、其社郡内に十ヶ所あり、大野郡守月郷及日州三河内にも惟治の廟あり、同地古江島八浦あたりには同遺霊を祀れるもの六ヶ所あり。

と記し、郷内十社の富尾社由来を列記してある。

辨妄所載の十社縁起は大略次のとおり。

富尾大権現社　大山積神、日本武尊（天文七年七月廿五日）黒沢村船ヶ下。多田弥四郎、多田弥四郎の女若狭に惟治の霊憑き種々の怪異あり。依て梅牟礼城主に訴へ神に祭る、若狭は尼となり名を光定と称ふ。寛政年間佐伯城主毛利美濃守高誠の代には正月廿五日、七月廿五日の二回那代をして代参せしめたり。

富尾三社大権現社、午王熊野神、千代鶴（天文十年九月九日）堅田村石打、清松九郎次郎、宮司清松九郎次郎の母は惟治の嫡子千代鶴の乳母にして、其の従弟富田四郎五郎は千代鶴に従ひ西野村盤田に於て千代鶴生害の時佐伯伊賀と共に殉死したり。仍て清松九郎次郎は惟治及千代鶴の為め祠を石打に立て其の神霊を祀りたるが、後森九郎左衛門吉安堅田を領するに及び、祭祀の供を盛んに行ひたり。

富尾大権現社、大穴牟遅命、少彦名命（天十年歟）蒲江浦丸市尾、塩月新左衛門。大永七年惟治梅牟礼城を出、日州三河内を指して落る時、主従八人数僅か二十人ばかりにて蒲江浦丸市尾越田尾に行き、漁夫頭市右衛門と云ふ者に、名護屋崎より土佐に渡し呉れよと頼みたるも市右衛門之を承諾せず、惟治主従此事に足搦して残念がりしも詮方なく、又日州に向ひ、翌日三河内の内尾髙和にて敵将新名治右衛門の為討れたり。惟治の遺霊丸市尾村に崇り、種々の奇怪あれば村民大いに恐怖して鎮守の神と祝ひ祭る。

鵜尾大権現社、熊野神（天文八年十一月十五日）大坂本宇蕗木、柴田左京。天文八年十一月十五日、市野瀬五郎八と云ふ者勧請す。

富尾三社大権現社、姪嶽大明神、千代鶴（天文三年九月二十五日）赤木村吹泉、安藤式部大夫。天文三年九月安藤式部大夫の勧請する所なり。式部大夫の父安藤飛弾守義高、佐伯家の客分となり惟治の高恩をうけたが、式部大夫の時浪人して赤木村吹泉に居けるが家祖の恩誼を思ひ、惟治の為祠を立て其霊を神と祭りたるなり。

鵜尾大明神社、天津穂日命、大山祇命（享禄三年十一月二十五日）横川村月形、小野某。佐伯家の老臣長田左近と云ふ者の娘八重なる女、惟勝の妾となりて梅千代御曹子を生む。惟勝寵愛深くついに妾を正室になさんことを家臣等に謀り給ひしに、市野瀬近江守をはじめ一門の人々も大いに之を妬み、終に梅千代を毒殺す。仍て梅千代の霊を梅牟礼城下迫田の今熊社内に祭り、梅の宮と称したり。此八重と云ふ女梅千代の守刀猫丸と云ふ短刀を申請ひて横川村月形に蟄居し、次の御曹子惟治も三十二才にて討死したれば月形に一社を建てて、佐伯家の祖先、梅千代の霊及び惟治の霊三ツを合祀して鵜尾大明神と祝ひたり。又猫丸と云ふ短刀は神体と云ひ伝へ、今赤木村西野内の百姓家に秘蔵するも人之を見る時は盲目となると申伝へたり。

富尾大権現社、（天文七年十一月六日）上直見村神ノ原、真田左源太。惟治恩顧の家臣甲斐弾正と云ふ者はじめて祭る。

富尾大権現社、（天文十年十一月二十五日）切畑村江良、橋迫幸太夫。惟治の家臣下川治郎左衛門と云ふ者に惟治の霊憑き種々の怪異ありしかば之を神に祝ひて富尾大権現と号し、橋迫幸太夫を宮守とす。

富尾大權現社、宇賀御魂、猿田日比古命、（天正二年六月十八日）下野村脇、柴田某。脇村の山中に山上寺とて春好法師が魔法を勝したる遺跡あり、当時惟治は春好に随ひて魔法を行ひたるに、偶々其の意に戻れる事ありとて春好を討果したり。春好の怨魂惟治に祟をなし、惟治も遂に城を出て討死を遂ぐるに至りたれば、臣下の者共深く之を歎き居たるに、時しも千石火とて毎夜怪しき火の空中に燃えて飛行するものありければ、人々打驚き、則の者共往きて其怪火を窺ひ見るに、惟治の首と春好の首とが上下になりて火車の如く戦ふなり。又其火は宇目の辺まで通ふなど噂とりどりなりければ、惟治の為其亡霊を鎮めまつらんと計り、深矢内記之を神に祝ひ富尾大權現と称したるを後若宮大權現と改めたり。

富尾大權現社、大山積命、少彦名命（天文十年六月十六日）海斉山ノ口、久々宮市太夫。久々宮伊勝少輔清信と云ふ者一夜夢に大蛇の上に惟治の亡霊乗り居て、清信に対ひ爾等は三重組の物頭なるに恨めしやと述べてなどの語は定かならず、大蛇頭を擡げて清信を呑んとすと見たり。夢覚たる後其事を山口理左衛門と云ふ同志に語りたるに、我も正しく其如き夢を見たりと云ふ。仍て両人深く心に感じ惟治の遺霊を慰める為め土地の鎮守として之を祭祀したるなり。

なお辨妄に『宇目郷に二社あり』とあるが、それは佐伯史談第六号所載の、宇目町大原の鵠野尾社と同町千束の鵠野尾社で、いずれも旧村社、前者は甲斐伊賀という者が天文中に創祀したと伝え、社頭にそびえる大杉に鳥が惟治のはらわたを咥えてきてとまったので、この土地に祭ったという伝説がある。後者は深田氏の祖先が慶長五年ごろ奉祀したという。また辨妄にいう日州三河内の惟治廟は、尾高千山の廟ささすものであろう。

富尾は『トミノオ』であるが、本来は鵠尾（トビノオ）で、佐伯地方では『トビノオ』と読んでいる。大分大学の富永隆先生はかつて『蛇神さま』という民族伝承の研究を発表されたが、その中で

緒方惟栄は身体に蛇の尾とウロコの形がみられたといわれ、赤系佐伯惟治は邪教にこったとして大友氏に攻め滅ぼされたが、富尾社、鳥尾社（トビノオ社、トビ＝トウビ＝蛇神である）として祀られた。

また、

南海部郡の山中のあちこちに富尾社あるひは鳥尾社としてまつられる佐伯惟治は緒方氏の末であり、そして緒方氏の発祥は祖母山の大蛇神との結婚によったのである。

とのべている。つまり富永先生は蛇神を俗に〝トウベ〟〝トベ〟あるいは〝トウビ〟ということから〝トウビ〟が転じて〝トビ〟に変り〝トビノオ〟の神号が生れたのだろうと解しており、大神、緒方氏の姫嶽祖神信仰の関連上に富尾權現の祭祀をおいている。

たしかに原始信仰のトーテミズムは、部族の祖神信仰に連なっているとはいえるだろう。しかし、私は富尾神の祭祀が蛇神信仰の変形であるとは思わない。も

富尾三社大権現社、午王熊野神、千代鶴（天文十年九月九日）堅田村石打、清松九郎次郎、宮司清松九郎次郎の母は惟治の嫡子千代鶴の乳母にして、其の従弟富田四郎五郎は千代鶴に従ひ西野村盤田に於て千代鶴生害の時佐伯伊賀と共に殉死したり。仍て清松九郎次郎は惟治及千代鶴の為め祠を石打に立て其の神霊を祀りたるが、後森九郎左衛門吉安堅田を領するに及び、祭祀の費を盛んに行ひたり。

富尾大権現社、大穴牟遅命、少彦名命（天十年歴）蒲江所丸市尾、塩月新左衛門。大永七年惟治梅牟礼城を出、日州三河内を指して落る時、主従の人数僅か二十人ばかりにて蒲江浦丸市尾越田尾に行き、漁夫頭市右衛門と云ふ者に、名護屋守より土佐に渡し呉れよと頼みたるも市右衛門之を承諾せず、惟治主従此事に足摺して残念がりしも詮方なく、又日州に向ひ、翌日三河内の内尾高和にて敵将新名治右衛門の為討れたり。惟治の遺霊丸市尾村に崇り、種々の奇怪多れば村民大いに恐怖して鎮守の神と祝ひ祭る。

鵜尾大権現社、熊野神（天文八年十一月十五日）大坂本宇蕗木、柴田左京。天文八年十一月十五日、市野瀬五郎八と云ふ者勧請す。

富尾三社大権現社、姫嶽大明神、千代鶴（天文三年九月二十五日）赤木村吹泉、安藤式部大夫。天文三年九月安藤式部大夫の勧請する所なり。式部大夫の父安藤飛弾守義高、佐伯家の客分となり惟治の高恩をうけたが、式部大夫の背信人して赤木村吹泉に居けるが家祖の恩誼を思ひ、惟治の為祠を立て其霊を神と祭りたるなり。

鵜尾大明神社、天津穂日命、大山祇命（享禄三年十一月二十五日）横川村月形、小野某。佐伯家の老臣長田左近と云ふ者の娘八重なる女、惟勝の妾となりて梅千代御曹子を生む。惟勝寵愛深くついに妾を正室になさんことを家臣等に謀り給ひしに、市野瀬近江守をはじめ一門の人々も大いに之を妬み、終に梅千代を毒殺す。仍て梅千代の霊を梅牟礼城下迫田の今熊社内に祭り、梅の宮と称したり。此八重と云ふ女梅千代の守刀猫丸と云ふ短刀を申請ひて横川村月形に蟄居し、次の御曹子惟治も三十二才にて討死したれば月形に一社を建てて、佐伯家の祖先、梅千代の霊及び惟治の霊三ツを合祀して鵜尾大明神と祝ひたり。又猫丸と云ふ短刀は神体と云ひ伝へ、今赤木村西野内の百姓家に秘蔵するも人之を見る時は盲目となると申伝へたり。

富尾大権現社、（天文七年十一月六日）上豊見村神ノ原、真田左源太。惟治恩顧の家臣甲斐弾正と云ふ者はじめて祭る。

富尾大権現社、（天文十年十一月二十五日）切畑村江良、橋迫幸太夫。惟治の家臣下川治郎左衛門と云ふ者に惟治の霊憑き種々の怪異ありしかばこれを神に祝ひて富尾大権現と号し、橋迫幸太夫を宮守とす。

富尾大權現社、宇賀御魂、猿田日比古命、（天正二年六月十八日）下野村勝、柴田某。勝村の山中に山上寺とて春好法師が魔法を勝したる遺跡あり、当時惟治は春好に随ひて魔法を行ひたるに、偶々其の意に戻れる事ありとて春好を討果したり。春好の怨魂惟治に祟をなし、惟治も遂に城を出て討死を遂ぐるに至りたれば、臣下の者共深く之を歎き居たるに、時しも千石火とて毎夜怪しき火玉の空中に燃えて飛行するものありければ、人々打驚き、剛の者共往きて其怪火を窺ひ見るに、惟治の首と春好の首とが上下になりて火車の如く戦ふなり。又其火は宇目の辺まで通ふなど噂とりどりなりければ、惟治の為其亡霊を鎮めまつらんと計り、深矢内記之を神に祝ひ富尾大權現と称したるさ後若宮大權現と改めたり。

富尾大權現社、大山積命、少彦名命（天文十年六月十六日）海斉山ノ口、久々宮市太夫。久々宮丹波少輔清信と云ふ者一夜夢に大蛇の上に惟治の亡霊乗り居て、清信に対し爾等は三重組の物頭なるに恨めしやと述べてあとの語は定かならず、大蛇頭を擡げて清信を呑んとすと見たり。夢覚たる後其事を山口理左衛門と云ふ同志に語りたるに、我も正しく其如き夢を見たりと云ふ。仍て両人深く心に感じ惟治の遺霊を慰める為め土地の鎮守として之を祭祀したるなり。

なお辨妄に『宇目郷に二社あり』とあるが、それは佐伯史談第六号所載の「宇目町大原の鵜野尾社と同町千束の鵜野尾社で、いずれも旧村社、前者は中尻伊賀という者が天文中に創祀したと伝え、社頭にそびえる大杉に鳶が惟治のはらわたを咥えてきてとまったので、この土地に祭ったという伝説がある。後者は深田氏の祖先が慶長五年ごろ奉祀したという。また辨妄にいう日州三河内の惟治廟は、尾高千山の廟ささすものであろう。

富尾は『トミノオ』であるが、本来は鵜尾（トビノオ）で、佐伯地方では『トビノオ』と読んでいる。大分大学の富永隆先生はかつて『蛇神さま』という民族伝承の研究を発表されたが、その中で

緒方惟栄は身体に蛇の尾とウロコの形がみられたといわれ、末裔佐伯惟治は邪教にこったとして大友氏に攻め滅ぼされたが、富尾社、鳶尾社（トビノオ社、トビ＝トウビ＝蛇神である）として祀られた。

また、

南海部郡の山中のあちこちに富尾社あるいは鳶尾社としてまつられる佐伯惟治は緒方氏の末であり、そして緒方氏の発祥は祖母山の大蛇神との結婚によったのである。

とのべている。つまり富永先生は蛇神を俗に"トウベ""トベ"あるいは"トウビ"ということから"トウビ"が転じて"トビ"になり"トビノオ"の神号が生れたのだろうと解しており、大神、緒方氏の姫嶽祖神信仰の関連上に富尾權現の祭祀をおいている。

たしかに原始信仰のトーテミズムは、部族の祖神信仰に連なっているとはいえるだろう。しかし、私は富尾神の祭祀が蛇神信仰の変形であるとは思わない。も

つとも富尾権現祭祀縁起の中には、惟治の亡霊が大蛇の上に乗って現われたというものもあるが、十社縁起の頃とんどは惟治怨霊の祭祀である。

富尾は鴟尾の文字を美化したものであるが、鴟尾は『シビ』『トビノオ』と読み、①牛車の後方に差し出た二本の短い棒、②宮殿などの棟の端にとりつける飾り瓦、という二つの解があるが、神号としては②の解から「屋の棟に宿る神霊」を意味しているといってよい。

奈良朝末期から平安朝初期にかけて怨霊信仰がおこった。三代実録巻七、貞観五年五月の記に

廿日壬午、於二神泉苑一修二御霊会一（略）所謂御霊者、崇道天皇、伊豫親王、藤原夫人、及観察使、橘逸勢、文屋宮田麻呂等是也。並坐事被誅、冤魂成厲、近代以来、疫病繁発、死亡甚衆、天下以為、此災（災）、御霊之所生也。（略）今茲春初咳逆疫、百姓多斃、朝廷為祈、至是乃修此会、以賽二宿禱一也。

とあるが、これは朝廷が行った最初の御霊会で、それまでは民間行事であった御霊（怨霊）信仰が、神仏習合の神事祭儀として公行事に発展したのである。御霊神とは冤罪などで非業の最期をとげ怨恨を残した貴人の霊を祀ったもので、朝廷の御霊会では六所御霊、八所御霊といった。御霊信仰でもっとも有名なものは、菅原道真を祀る北野天満宮、大宰府天満宮で、これは雷電となって藤原時平一派を苦しめた菅公の神霊を、北野の地主天神とよばれる御霊神と合祀したものという。天満社、天神社は菅公の神霊として全国津々浦々に祭祀されているが、その多くは天神とよばれる御霊神で、土地の神霊である。

中世以降、御霊神には伝説的な武人、勇者を祀るようになったが、一面怨霊神としての性格も強く残った。鎌倉権五郎景政とか千葉五郎（千葉介常胤）などの武人を祭る御霊社へごろうしゃ）はまた五郎社とよばれているが、これは巨人信仰に関連しているといわれる。

県内の御霊社には祭神のはっきりしないものと、大野九郎泰基の神霊を祀ったものがある。大野泰基を祭神にするものは、大友氏に反抗したその壮志と悲運に仆れた怨恨を思い、土地の鎮守としたもので、富尾神の祭祀に通じるものがある。

富尾権現は最初から神仏習合で祭祀されている。そのため権現というのであるが、この祭祀方式は御霊信仰の方式で、富尾神が御霊神であることを証明している。

佐伯地方には富尾権現社のほかに御霊社がなお数祠ある。本孟村因尾の三竈江明神社と前高明神社、および直川村の附切明神社で、ともに平家の落武者という光世、光国兄弟を祀ってある。大友興廃記巻十三の『三竈江大明神之由来』によれば

それより光世牛に乗じて、兄弟共に世利山という深山に紛入たまふ。乗りたる牛労て一足も立かず、光世嗔て牛の頭を斬り、竹の鞭を其山にさし置て、因尾の里に出たまふ。右の牛を害したる山の近所に、玄貞といふ山居人有て、其の牛の頭を神にいはく、牛の頭大明神と号して崇め置く。（略）因尾に於て光世、光国、緒方三郎惟栄が害に誅せらる。後魂未だ冥漠に帰せず、魄未だ泉に至らず、惟栄に崇り有り。是に依て、宮造して光世を三竈江大明神と号し、光国を前高大明神と号す。（畏）豫て落居の時、佐伯の内猶海と云ふ所にて、御人の奴

原矢を射かけ、光世の眼にあたる。卿人忽ち罰を蒙り、報事甚し、是に依て宮造し、就刑大明神と号て今に祭り・云々。

とあつて、光世、光国という平家の落武者にからまる怨霊祭祀をのべている。この縁起（由来）にある神社は因尾の三靈江、前高両神社と直川の射切神社であるが、今一つ牛の頭大明神というのが出ている。これは光世の殺した牛の頭を玄負という山居人（山伏）が祀つたことになつているが、説話の形態は熊野牛王社の伝承を誤伝したもので、牛頭天王つまり牛王祭祀をのべたものである。（宝暦の御領分中寺社記によれば上直見、中野、因尾にかけて牛王社は八カ所ある）三靈江明神は光世を祀り、前高明神は光国を祀つている。この二社ははつきりした御霊信仰（怨霊を祀る）であるから問題はないが、就刑大明神には問題がある。就刑明神は現在の射切神社といわれる。体石博美氏の『射切社由来記』（佐伯史談第二十号）によると、祭神は市杵島姫命、田心姫命、湍津姫命の三柱で厳島明神であるとしているが、この三女神は宗像三柱大神である。この社祠は宝暦御領分中寺社記には、上直見村薗の大明神と記され、射切社の神号は見あたらない。射切神社が光世伝説の就刑大明神であるなれば、これは当然光世の霊を祀つたもので御霊社である。なお三靈江、前高両神社はおそらく御霊社であるとともに、因尾柳井一党の地主神であろう。（光世、光国の伝説は柳井一族の祭祀を語る説話であると思う。）

（本会会員・佐伯市下堅田、事志河内）

研究

亡びゆく堅田路の庵寺

岩田正城

早春の一日、堅田路を目ざして佐伯大橋に到れば、左手に上久部東禅寺の本堂の瓦が望見される。舗装工事半ばの久部津留を過つて中山トンネルを過ぎれば田崎（左ぶち）である。

右手の山の中腹にあるのが天徳寺であり、その道を行けば上城（かみじょう）光久寺があり、更に道は大越川にそうて岸河内の中央を貫き、長覆原の古戦場を左に見て大越に達し、直川村改家に抜けている。近日高木会長のお計らいで、この道の改家から柴を越して大越、岸河内と下る自動車での走行がこころみられることに寄つていて、往時交通の状態はどうであつたか、どんな事物の研究が出来るか、楽しみにしている。

さて田崎から道を直進すれば汐月で、右手に栗本領寺派真正寺がある。慶長十八年の創建と伝えられ、当時は天台宗に属し法音寺と号していた由で、法音寺の地名は今も残つている。

左手の村が柏丘であり、龍王山麓に江田寺があり、堅田川の流れを前にして禅寺の威儀を正した佇たずまいを見せている。年来の河川工事によつて雄大な堤防がほぼ完成し、道路が高くなり山門の石段も高い左右の石垣も半ば土中に埋もつて、わずかに頭だけを出していると言つた感じである。寺の威容が失われた、景観がそこなわれたと村の人は嘆いている。正に予想出来ない世の中の推移である。

更に泥谷には正明寺、浪越には別の常楽寺が幾百年の